

めでいかすとる *Médicastre*



「山戸能」

鶴岡地区医師会

18年5月

第69回医師会勉強会抄録

日 時：平成18年4月21日（金）

場 所：医師会3階講堂

『地域医療連携と情報技術』－制度の行方、医療の行方

慶應義塾大学 環境情報学部政策メディア研究科

特別研究講師 秋山美紀氏

国は、「質の向上」「安全確保」「効率化」という目標を掲げて医療分野の情報化を推進している。個々の目的は、患者安全、医療機関の経営効率化、地域医療資源の効率運用、蓄積した大量データ分析にもとづく医療の標準化、国全体の資源配置の効率化というミクロからマクロレベルまで多岐にわたる。

こうした流れの中で「電子カルテ」にかかる役割も多岐にわたるが、の中でも大きな期待をされるのが、地域医療連携のコミュニケーションメディアとしての電子カルテネットワークであり、鶴岡地区的「Net4U」はこの代表的な事例である。

地域医療連携におけるIT活用は、限られた医療資源を有効活用し、医療の質を底上げする可能性を持つ。病院に押し寄せる外来患者や退院後の患者を、地域の診療所や訪問看護師、薬剤師等の医療提供者がチームワークを組んで診ることができれば、病院という希少資源はより高度な医療に専念でき、社会的コストの節約につながる。その際に円滑なコミュニケーションと必要十分な情報共有ができれば、患者にとっては長く待たずして、地域の専門家チームに十分で質の高いキュアとケアをしてもらえる。こうした観点から、医療機関の機能分化と連携、そして情報化は、我が国の政策として平行して推進されてきた。

しかし、全国の取り組み事例から既に明らかなように、そう簡単に事は進まない。単に道具を入れただけで協働が生まれるという幻想は通用しないことは明白である。医療従事者がチームを組み治療にあたるには、相互信頼が必要不可欠であるという当たり前のことが見過ごされてきたようだ。ここでいう「信頼」には二つの意味がある。ひとつはプロフェッショナルとしての腕や能力に対する信頼だ。もうひとつは、善意に基づく互酬的な信頼であり、これはネットワーク全般に共通する課題である。ネットワークには、コストを負担する当事者以外も経済的な効果を受けるという外部性が働く。それゆえに、貢献した者が見返りを得にくい、労多くして報われないということも多々あり、フリーライド（ただ乗り）問題が発生する。情報共有と協働の場を維持できるかどうかは、経済的、非経済的なインセンティブの設計が成否を分けることになる。

酒田地区医師会総会後懇親会に招待されて

社団法人 鶴岡地区医師会
会長 中目千之

さる4月27日、酒田地区医師会の総会後におこなわれた懇親会に招待され行ってきました。これまで、近くにありて遠い両医師会でありましたが、今回、両医師会とも会長が変わり、また、二人とも同じ年であるということから、本間清和新会長のご配慮により実現したものです。これをきっかけに、お互いの医師会の運営や問題点などを話し合い、取り入れるべきものはどんどん吸収して発展しようということあります。また、大規模災害時の協力という点から、お互いの情報を共有する必要性を認識したからでもあります。

酒田地区医師会は、総会と懇親会は同日開催でした。6時から総会をし、その後7時から懇親会が開催されました。総会では、進行をスムースにおこなうため、あらかじめ事前に質問を受け付けており、1時間で終了しているようです。懇親会では最終的に65名の出席者で、最近ではこれほどの参加者はなく、これも新体制になったためとのことでした。はじめに本間会長が挨拶をなされましたが、あの「さんぺら」といわれた本間先生が、めずらしく緊張して、口ごもることがあったり、また、本間先生の意気込みに皆感動したり、とにもかくにも本間丸の船出というか、出陣式が滞りなく行われました。

つづいて、阿部酒田市長(代理)の挨拶が行われ、私も挨拶を行ってきました。

鶴岡地区医師会では開業して間もない先

生方を役員にいれて、活性化に努めていることや、これからは人作りをしないと組織がもたないことなどを話しました。宴会の途中には、飛島で過疎の地域医療を実践している先生の苦労話や、新規開業の先生方の希望に満ちた挨拶がおこなわれ、まさに懇親会は盛況、感極まり。

9時過ぎにお開きとなり、二次会への勧誘を必死にお断りして、帰路に着きました。

6月の観桜会には、本間先生を招待しております。本間節が聞けそうです。

新莊内病院3年目を迎えるに当たって

—新病院の建設・現状・展望について— その2

鶴岡市立莊内病院院長

松原要一

莊内病院は平成15年6月27日に創立90周年を迎え同年7月1日に新病院へ移転・開院した。多くの課題に対処しつつ約2年10ヶ月を経過した。今のところ順調に運営・経営されている。本誌でこれまで前々回および前回の二回に分け建設設計画から新病院までの取り組みと新病院の概要・特徴を述べた。今回最終回としてその現状と今後の展望を述べる。

1. 新病院の現状

1) 部門IT化について

新病院には今後さらに厳しくなる医療情勢と改悪が予想される医療制度改革にできるだけ対応できる設備とシステムを整備することができたと思われる。最大の成果は院内の部門IT化とそのネットワークを構築すること、すなわちオーダリングを含む電子カルテを中心とした統合医療情報システム(S-HIS)の実現であった。これは各部門業務の適正・効率化、診療録管理、医療水準の向上、地域医療連携の推進などに有用で、病院運営・経営になくてはならない存在となっている。今後当院がいわゆるインテリジェント・ホスピタル(Intelligent Hospital)を目指すことを可能にしている。実際にDPC(Diagnosis Procedure Combination)による入院医療の包括評価システムの導入、SPD(Supply Processing Distribution)システムのさらなる進化および地域医療支援システムの確立などを容易にすると考えられる。

現在稼動しているS-HISの関連図を示す(図1)。部門システムは全部で20に分けられる。これらは独立した物流・ME管理と財務会計・人事管理システム以外は、28台のサーバーを介して繋がれて(統合されて)いる。このうち図中央のDE-カルテ(いわゆる電子カルテ)など二重の四

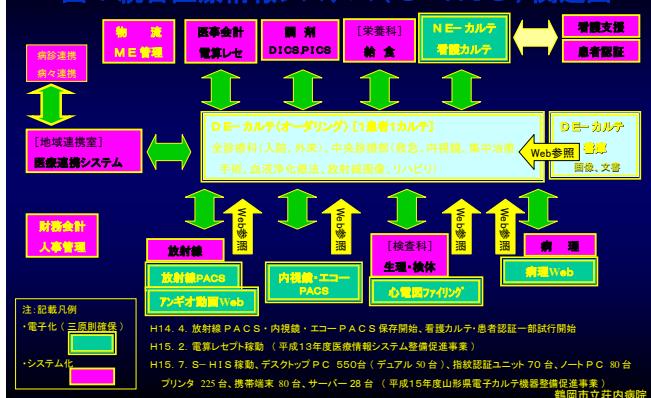
角で囲んだ8つのシステムは電子化三原則を確保したシステムで、それらはWeb方式でその医療情報を5秒以内のレスポンスで相互に参照できる優れものである。最近はこの方式が主流となっているが当時は珍しく、この採用は難しい選択であったが正解であった。

S-HISの端末PCは630台で、そのうち外来診察室などで画像や書類を参照しながら短時間で診療を可能にするデュアルディスプレイ(画面が二つ)が50台である。ほかの周辺機器として、医師の指紋認証器70台、患者認証ユニット(一次元バーコードシステム)70台、プリンタ225台、物量管理システムの二次元バーコードシステム

端末32台を備え、加えて内科・小児科・放射線科・救急外来・医局・地域医療連携室などに31台の医師会Net4Uの端末が設置されて地域医療連携に使用されている。これまで、千数百名の医療関係者が新病院の視察に訪れ、最も驚いたのがこのS-HISである。

情報システム業者への管理委託費(運用経費)は医療収益の1.5%にあたる約1.4億円でそれほど高くはない。その効果について、経済面から具体例を挙げると、診療報酬の請求漏れ防止とその

図1 統合医療情報システム(S-HIS)関連図



査定率の著しい減少（0.71→0.41→0.25%）で、旧病院時代に比べて年間5千万円以上の収益改善効果が見られる。さらに、紙カルテの場合を仮定すると、カルテ庫、フィルム庫、診療録・書類管理、カルテ検索装置、カルテ搬送などが不要となり経済的である。もちろん、医療の質からは、紙カルテより診療が楽だけでなく、医療情報共有によるチーム医療の推進は予想以上である。

2) 新病院の医療概要

新病院でフル稼働となった最初の平成16年度の医療概要を表1に示す。前回示した開院前の旧病院最後のフル稼働であった平成14年度の診療概要と比較して、医師数と看護師数は若干増えたが職員総数としてはあまり変わらない。一方外部委託職員数は34人から78.5人と2倍以上に増加した。また医業収益（外来・入院・その他）も約8.2億円增收になった。これは開院一年目としては予想外のことと、明らかに医療の質が変わったことを示している。実際ベッドは521床から510床に少なくなったが、入院患者数は17.6万人（稼働率で92.9%）から18.4万人（稼働率で98.6%）に増加、平均在院日数は19日から15日に減少、診療単価は33,015円から36,557円に上昇、収益としては9.2億円の增收となった。一方、外来患者数は救急患者数が17,013人から23,816人に増加したもの、総数で33.1万人から25.5万人に著しく減少した。しかし診療単価が7,755円から9,733円に上昇したので収益は0.9億円の減少で済んだ。経常収支としては10.2億円の赤字であるが、現金支出を伴わない減価償却費等を除くと、

表1 平成16年度診療概要

一般病床：510床（11単位）、24診療科
職員数 643人（医師数73人、看護師数386人、他）[定数 570人]
委託職員数 78.5人

入院患者数 18.4万人 / 365日（503人/日）
稼働率 98.6%、平均在院日数 15日、入院診療単価 36,557円
外来患者数 25.5万人 / 243日（1,050人/日、救急外来患者数含む）
紹介率 27%（41%）、外来診療単価 9,733円
救急外来患者数 23,816人 / 24時間・365日
救急車搬入数 3,826人、救急入院患者数 4,683人

医業収益 96.09億円、経常損益 -10.22億円、減価償却 12.89億円
実質残額 1.97億円、内部留保額 19.63億円

H12～16年の査定率の推移%:0.73、0.61、0.41、0.39、0.37（*0.25）

鶴岡市立荘内病院

実質残額は1.9億円の黒字となった。これもまた一年目としては予想外のことであった。平成17年度もベッド稼働率は97.8%で、決算では数千万の実質残高の黒字が見込まれている。

平成7年から16年までの当院の運営・経営状態の推移を表2、表3に示す。表3下段の内部留保は病院事業会計（公営企業会計）での流動資産から流動負債を除いた額で、これは現金化できる資産すなわち運転資金（貯金）に相当する。ただし、これは予算以外の経費に使うことはできないものの、不良債務（実質赤字）が生じた時には支出できる。したがって、これは公立病院の財政能力（体力）を示す。この額は、当院規模だと一ヶ月の経費が約7億円なので最低14億円ないと毎月借り入れをしなければ支払いが容易でない。また、新病院では当初経費の急増に対して増収できたとしてもそれに直ぐは追いつかないため、開院前に25億円以上の内部留保が必要であると考えられていた。その推移を見ると、平成10年度は7.64億円と危険な状態であったが、平成12年度に16.03億円に、開院前の平成14年度には25.4億円と目標額を達成している。平成15年度は移転・開院に伴う約2ヶ月間の医療制限で想定範囲内ではあるが7.74億円の実質赤字となり、その分内部留保額は減少した。しかし平成16年度には実質残高が黒字となり、再び増加した。平成17年度決算でも額は少ないが増加する見込みである。

表2 荘内病院の運営・経営状態 I

平成年	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
入院数千人	174	174	176	175	176	175	180	179	177	173	184
稼働率 %	92	92	92	92	93	92	95	94	93	92	99
外来数千人	328	345	352	343	332	342	326	324	286	251	255
救急	15	15	16	16	17	18	21	21	21	21	25
職員数 人	632	659	656	657	655	654	650	660	661	670	643
医師数	62	63	62	63	66	67	66	65	63	66	68
看護師	338	349	360	364	367	371	374	377	378	386	386

鶴岡市立荘内病院

表 3 荘内病院の運営・経営状態 II												
平成 年	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16		
収益百万円	10073	10158	9535	9477	9686	9656	9671	9518	9265	10326		
医業	9225	9287	8618	8624	8748	8865	8892	8790	8489	9609		
費用	9904	10130	9515	9447	9516	9383	9341	9379	10191	11348		
医業	9709	9953	9358	9301	9381	9258	9211	9241	9765	10624		
減価償却	399	433	371	373	348	319	302	280	250	1289		
経常損益	168	28	20	30	170	273	330	139	-926	-1022		
内部留保	421	446	553	764	1159	1603	2201	2540	1766	1963		

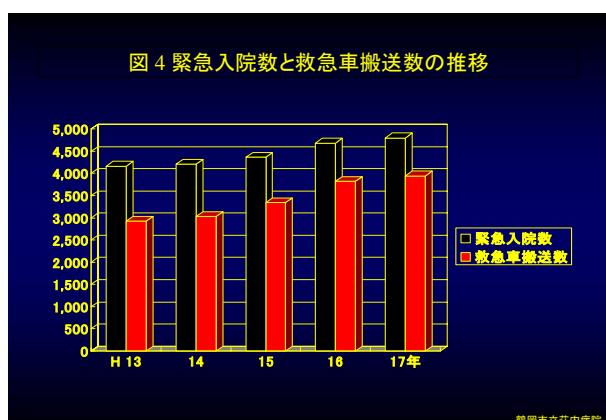
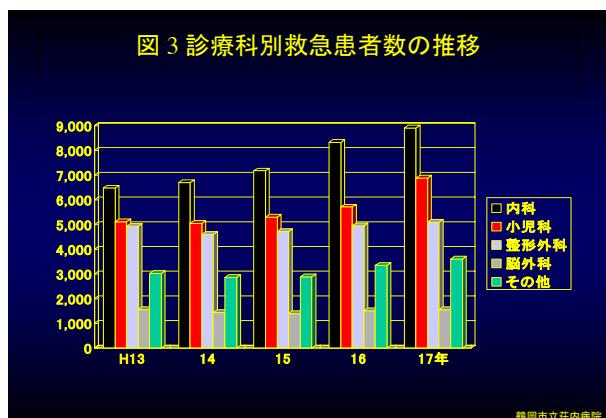
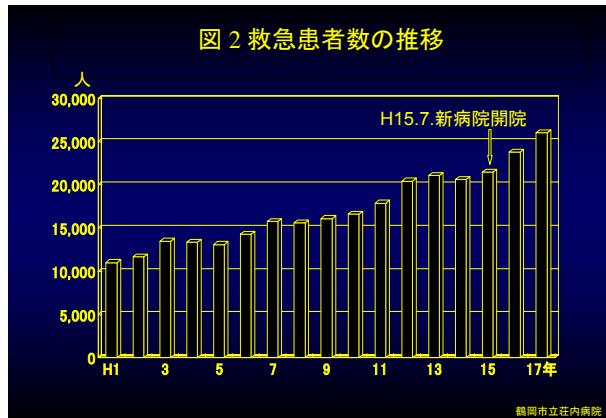
鶴岡市立莊内病院

3) 救急医療

市立病院なので救急医療を避けて通れない。しかし、当院の医師確保と医療水準の向上のために最も大きな課題は救急医療と外来診療である。外来診療は病病・病診連携で何とか対応しつつある。しかし、救急医療については当院の取り組みと同時に患者さんおよび市民と、医師会、特に診療所の医師の考え方にも考慮すべき問題が多いと思われる。

救急医療の推移を図 2、3、4 に示した。平成 11 年当院に筆者が赴任した当時、既に救急患者数は年間 15,000 人を超え、病院の日常診療に影響を及ぼしていた。若い出張医は「地獄の日・当直（救急診療）」と言い、送別会では「二度と莊内病院には来ない」と挨拶する者が多かった。大変な事態にもかかわらず、それまで何ら有効な対策を立てることができなかつたようで、新病院移転を考えると容易ならざることであった。以来 5 年かけて救急診療対策を行ってきた。地域特性から救急患者数は 25,000 人まで増える見込みで準備した。この詳細については莊内病院医学雑誌を参照して欲しい。しかし、実態として内科と小児科の患者数の増加が著しく、平成 17 年には予想を超える 26,000 人に達した。これ以上は大きく増えないとは思うが、ほぼ当院の限界と考えられる。また医療面だけでなく、経営的には不採算であり、現状の繰入金（救急診療補助金）では、今でも相当の負担で、これ以上の負担は経営を圧迫することになる。医師の増員は難しい状況ではあるが、

それを含めいくつかの新たな対策が必要とされている。

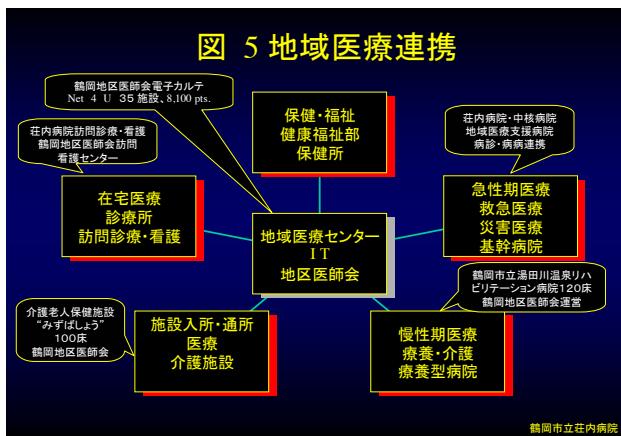


2. 今後の展望

今年度（平成 18 年度）の診療報改定(改悪)で、当院規模の病院では、平成 16 年度の医業収益でシユミレーションすると約 4% の減収となるとされている。その対策をするのはもちろんであるが、内部留保を使って二、三年は何とか乗り切れると思っている。しかし、もし医師不足が改善されないか、平成 20 年度以後も医療費削減・診療報酬引き下げが続くと、新病院を市立病院として存続

させることは経営的には困難と思われる。市立病院として生き残るためににはほかより先に潰れないようにして状況が良くなるまで待つしかないであろう。

それもあって、新病院では時代を先取りするべく様々なシステムを整備し、新医師臨床研修制度などにも対応できるようにした。今後は、もう一度地域医療を見直し、当院の役割を明確にするとともに、地域医療機関の機能・役割分担による医療連携を強力に進めなければならない。具体的に成果を挙げるためには、図5で示したシステム化を地区医師会中心にして行なうことが良いと考えている。



医療をその機能とし、地域医療情報ネットワークの中核病院としての役割を果たし、高度医療については県立病院および大学病院との連携を推進しなければならない。そのためには、県立病院や大学病院に対し、そして地域の病院や診療所に対し、それぞれ当院ができるることは何か、それをどうやって実行するかを課題に取り組みを進めたいと思う。一方、逆に相手が当院にできることは何か、何をするのかを見極めることも重要と考えている。当院の医療水準が低下し、市立病院を続けることができなくなる事態は、この地域の医療にとって良い訳がない。当院の勤務医の多くが辞めて当地区を引き上げるようなことがないように、当院だけでなく、地域全体として真剣に考え、対応しなければならない状況にある。

参考文献・資料

- 1) 三科 武：削り節当直、山形県医師会報 557 ; 7- 8、1998
- 2) 松原要一：市立庄内病院の目指すものと鶴岡地区医師会とのかかわり（都市地区医師会コーナー）山形県医師会報、586 ; 19- 20、2000
- 3) 松原要一：鶴岡市立庄内病院における救急医療について、山形県医師会報、606 ; 17 - 22、2002
- 4) 松原要一：鶴岡市立庄内病院における救急医療の検討- 最近三年間を中心に- 、鶴岡庄内病院誌、14 ; 1- 9、2003
- 5) 松原要一、ほか：医師会活動を考えるシンポジウム- 患者と医師の信頼関係- 、山形県医師会報、618 ; 68- 69、2003
- 6) 松原要一：新庄内病院は今（都市地区医師会コーナー）、山形県医師会報、633 ; 10- 11、2004
- 7) 松原要一：当院における新医師臨床研修制度への対応（勤務医のページ）、山形県医師会報、639 ; 18- 19、2004
- 8) 三科 武：庄内病院での電子カルテと指紋認証システム、新医療、31(11) ; 48、2004
- 9) 松原要一：統合医療情報システムにおける情報管理（フロンティア）、全自病協雑誌、44(9) ; 7- 12、2005
- 10) 大滝雅博、三科 武、松原要一、ほか：医療情報電子化システム（電子カルテ）- 地方病院における電子化の取り組み- 、小児外科、37(5) ; 561-567、2005
- 11) 鶴岡地区医師会、庄内病院：特集「機能分化と連携」の新しい形、Part1 医療連携：先進事例：〈鶴岡地区医師会：Net4U〉顔の見える医療連携を目指して、月刊/保険診療、61(1) ; 18- 21、2006/07/12
- 12) 平成 17 年救急救助統計。鶴岡地区消防事務組合
- 13) 鶴岡市立庄内病院における救急医療の検討 - 新病院でどのように変わったか、最近 5 年間を中心に- 、鶴岡庄内病院医誌 17 卷 2006 (投稿中)

エー（A）会員になりました

- 新規開業医紹介 - No. 2

さいとうクリニック 斎藤元護

開業 3 年目

2003年10月に開業して2年半が過ぎました。父親の体調も考え、始めた開業準備でしたが、翌年の3月にその父も亡くなり、結果的にはぎりぎりになってしまいました。

同じ村内ながら場所を変えクリニックを新築し、そのプロセスは継承と言うより新規に値するものとなり、酒タバコの量は増え、体重はストレスで上下し、不健康極まりない毎日を送っていました。そんな中でも、今まで接することのなかった業種の方々との打合せは知らない世界の話が多く、楽しいものがありました。

開業してからは出勤に伴う移動も必要なく、今までにもまして運動不足を自覚するようになり、空港公園でのウォーキングを始めました。約1時間色々な草花、小鳥の鳴り、四季の変化を感じ取れる、人工的ですが広々としていて気持ちのいいコースです。しかし夏になると日陰もなく陽射しや汗の不快感が強くなり、暑さを避けて、朝4時半頃から歩いたりもしました。そんな時一度だけですがキツネを見かけたことがあります。コンなところにいたのかと驚きを覚えました。昨年からは自転車にはまっています。汗の不快感が少なく、こげばこぐだけスピードが出る、自己満足、チャリハイ状態です。気分や風向きでコースを変え最上川河口、三川町内～赤川土手、大山～水沢～田川方面、等勾配のないコースでサイクリングしています。そんな自転車生活



が、今では日常の一部として大切なものとなっています。

診療日 月曜日～土曜日（祝祭日は休診日）

診療時間 午前9時～12時30分まで

午後3時～6時まで

（土曜日は午後1時から休診）

マイペット&マイホビー

- 第33回 -

林 順一

パズル

クロスワードパズルの虜になって約20年経つ。ある旬刊雑誌のパズルは超難解で、少なくとも10日を要して14日以内の〆切に間に合う。問題を一覧して、すぐ答えが出るのはタテ・ヨコ各30問中、3、4問位で、あとは辞典と首引きの闘いになる。広辞苑、大辞林、逆引き大辞林（末尾の字が、例えば、雪のつく言葉や熟語が全て出ている）、類語、ことわざ、四字熟語、家紋、人名、歌舞伎・能・狂言のそれぞれの辞典、歴史・祭、自然情報日本地図帖、その他を必要とするほど問題の範囲が途轍もなく広い。答えは一つの言葉になり、この雑誌の名のカナの数も答えなければならない。

パズル(puzzle)とは元来「難問」とか「当惑」「困難」という意味で、知的な遊び、つまり考える要素を含む問題で、脳の神経細胞同志の回路を盛んに活動させる遊びであり、発想力、論理的思考力の訓練になる。やがて来るかもしれない「短期記憶」の低下や、認知症の予防になると思う。また常識や固定観念から解放され、初めて出会った「ことわざ」や「漢字」という知識の蓄積が豊富になる喜びがある。試験で間違いなく百点満点の解答が出来上がった時の満足感とか自信すら覚える。これまで一度、正解者の5人に入り金一封を稼いだ。

このパズルで新発見した字句をいくつか

挙げてみると、「時計」は実は当て字で、本来は「土圭」で、中国周代の緯度測定器のことだそうだ。「砂漏」とは砂時計のこと、「天河」は天の川のこと、波の花は「浪華」とも云う。「長汀曲浦」は曲がりくねって長く続いている海浜、年末のことを「朧尾」、ポケットを昔は「衣嚢」と、江戸時代の町医者の髪型を「慈姑頭」と云うそうだ。

「榻（牛車の乗降に使う踏み台）の端書」とは、思うようにならない恋の喩え、「鍋尻を焼く」は、夫婦となって世帯を営むこと、「足高を履いて首っ丈」は、異性に惚れ込み夢中になることとある。（下線は問題）

また、「数独」という、日本で生まれて、今や世界的流行となり、世界選手権もあるパズルも難航である。英語クロス、暗号パズル、数学パズルもかなりの思考力を要する。



カ メ ラ

私の医院の待合室は西に面していて、海が一望できる。開院以来、美しい夕陽の時は、すぐ下の浜にゆき、三脚を立てる。殊に上空が寒気に満ちる早春や、晚夏から秋にかけては、海と雲に映える落日真際の光景が、時々刻々と変化してゆく様は、まるで万華鏡を見ているようだ。

これから取り組んでみたい写真のテーマとしては、自然の織りなす紋様を撮ることである。磯の浅瀬の海底を、円偏光フィルタを使って水面の輝きを消して撮ってみると、その幾何学的、幻想的な紋様になるのが、実に美しい。

カメラはニコンF3/Tで75ミリ～130ミリのズームに、テレコンバータ付きが専用である。

旅行などにはコンタックスT2、ペンタックスistと軽いものを主に使用している。



磯 辺 の 海 底

コ ー ヒ 一

凝っているものもホビーとすれば、私にはコーヒーは欠かせない。毎朝、食事の後には入れたてを飲む。コーヒーカップは先代ゆずりのマイセン製である。豆は銀座の老舗喫茶店パウリストから直送してもらっていて、鉄製のコーヒーミルで挽き、ハリオ製の水出し器「コーヒードリッパー、ポタ」で、備長炭と医王石で作った自家製の水を用いる。ポタ、ポタと滴下するのを見ているだけで、心休まる一刻である。香りが食卓まで広がり、NHKのFMクラシックでも流れればもう最高の儀式。ネクタイを締めて、さあ診療室へ。今日の始まりだ。



正 月 の 夕 焼 け

准看第47回生研修旅行

期日：平成18年4月24日～4月26日まで

学びの多かった2年生の研修旅行 旅行委員 渡部美乃

4月24日から2泊3日の研修旅行を終え、見学先の多磨全生園で学んだこと・旅行委員としてクラスをまとめることの難しさを学びました。

多磨全生園では、元ハンセン病患者でもあり以前は療養所に入居していた方からお話を聞かせていただきました。療養所での生活は現在ではとても考えられない状況で、ハンセン病のことやその歴史などをもっとたくさんの方々に理解してもらい、偏見や差別のない生活になって欲しいと思いました。

研修後の会食では普段とは違うクラスメイトの様子を見ることができ、とても楽しかったです。入学してから1年以上が経ち、実習やいくつかの行事を通してきましたが、会食を通して、クラスでの交流が深まり、また新たな団結力が生まれるといいなと思いました。今回一番大変だったことは旅行委員として旅行全体の責任者でもあり、3日間の旅行の流れの把握とそれをクラスメイトに伝える難しさを学びました。『しおり』を作るにも予想以上に時間がかかり、先生やクラスメイトにも手伝っていただきました。

2年次は実習と授業の両立になり、その間にいろいろな行事も入ってくるので、1年次よりも協調性を高め、クラス全体での話し合いや役割などをスムーズに行なえるよう協力していく必要を感じました。研修旅行はたくさんの思い出ができました。

旅行委員 佐藤朝美

私たち47回生は2泊3日で東京方面に研修旅行に行ってきました。1日目は東京ディズニーランドに行き、2日目は多磨全生園での研修、3日目には主に都内での自由行動でした。

1日目のTDLではたくさんのアトラクションに乗ったり、キャラクターと写真を撮ったり、楽しい1日を過ごすことができました。

2日目の多磨全生園ではハンセン病の歴史や現状のお話を聞き、以前の療養所を復刻させた施設を見学させていただきました。授業でハンセン病についてのビデオを見てはいましたが、実際元

患者さんの話を聞いて、あまりにも酷い状況に驚きました。狭い部屋に多くの人が強制的に収容され、家族にも会えない、子供も産めない状況で本当に悲しい現実でした。病気が治癒しても家族から帰宅を拒否されたり、患者さんが亡くなられても遺骨も引き取ってもらえないことを聞き、言葉がでないくらいの衝撃を受け悲しかったです。研修をさせていただいてとてもよかったです。そして夕食は全員での会食でした。最上階から見えるとてもきれいな東京の夜景は最高でした。

3日目は都内自由行動で思い思いに買い物をし、班のメンバーと協力してやっと羽田空港に到着したのは集合時間の1時間前でした。全員無事に帰ってくることができ、本当に良かったです。

今回の研修旅行では学ぶことがたくさんあり、存分に楽しむこともでき、中身のぎっしり詰まった有意義な3日間でした。



私のお勧めの店

その7

横山 靖

『あんかけチャーハン』なるものを初めて知ったのは、フジテレビ系のテレビ番組『Vシュラン』で、花田勝氏（三代目若乃花）がおいしそうに皿をペロっと平らげているのを見たのが最初だった。この番組は料理のテーマをしぶり、事前に投票により評判の高い3店を選び、実際にゲストに食べてもらいNO. 1の店を決めるという趣向である。

チャーハンがテーマの時、たくさんの名店の中から、花田勝氏が選んだのは『あんかけチャーハン』のお店だった。まだ『あんかけチャーハン』を食べたことがない私には以外だった。チャーハンというものは、ご飯がパラパラで、油で炒めながらも塩味でサッパリと嫌味なく仕上げるものと考えていたのに、『あんかけチャーハン』ときたら、わざわざパラパラに仕上げたご飯に、とろみのあるベッタリしたあんをかけるのである。当然、普通の人がチャーハンに求める食感は失われると考えたくなるものである。一方でそんなことは百も承知のチャーハン好きの花田勝氏が普通のチャーハンを押しのけNO. 1に選ぶのだから、とってもおいしいのだろう、とも考えた。『あんかけチャーハン』とは誰が考えたのだろう。その後、福建チャーハンなるものがあり、それが海鮮のあんをかけたチャーハンだということを知った。福建省は香港のある広東省の北にあり、海峡をはさんで台湾の対岸にある。そのあたりが、『あんかけチャーハン』の発祥と関係しているのかもしれないが、はっきりしたことはわからない。そうこうしているうちに、日本テレビ系の番組「どっちの料理ショー」で海鮮のあんかけチャーハンが夏野菜カレーと対決することになった。そして、ここでも『あんかけチャーハン』が勝ったのだった。こうなると『あんかけチャ

ーハン』が食べてみたくなるものである。もちろん東京に行けば食べれるが、鶴岡市内でどこか食べれるところがないかと探していた。しかし最初に食べたのは酒田の中華料理の『菜花』さんだった。このお店に『蟹あんかけチャーハン』があるのである。いやー、確かにこの『蟹あんかけチャーハン』はうまかった。なんでこんなに、あのトロttiとした中華あんがチャーハンと合うのだろう。これは下が白いご飯ではダメだ。やはりチャーハンでなくてはいけないと思った。そうこうしているうちに酒田の『菜花』さんは、鶴岡に支店を作った。最初の頃は酒田の本店に及ばぬ味だったが、最近は安定し本店と変わらずおいしくなった。それで私も今では、この鶴岡店で『あんかけチャーハン』を食べている。チャーハンにあんをかけるなんて邪道だと思っている方もいるでしょう。まあ、百聞は一見にしかずである。一度食してみることを勧める。

菜花 鶴岡店
住 所 鶴岡市伊勢原町 2- 24
T E L 0235- 26- 2433



蟹あんかけチャーハン

Introduction

勤務医

No.72



平成18年3月よりこちらでお世話になっております。この鶴岡市で生を受け早30余年、当時銀座通りにあった三〇病院で生まれ落ち、幼少時は川端の荻〇小児科に肺炎で入院させて頂き、また喉が弱かった私は信用金庫近くの伊〇耳鼻科に通い詰め、イボができれば木〇済皮膚科にお邪魔し、兎に角、鶴岡地区医師会の諸先生方には大変お世話になり、大過なく高校生までを過ごすことができ現在に至っております。この場をお借りしお礼申し上げます。

他人の打ったゴルフボールが頭に当たるなど日常では考えがたいことありますし、また子供の頭蓋骨にしこりができるということでもあり耳にすることではありません。前者が私の父、後者が私自身であったことを考えると、医師を志した高校生の私が今、莊内病院脳神経外科に勤務していることは必然でもあり、はたまた運命の悪戯とも言え、非常に感慨深いものがあります。



およそ7年前に当院へお世話になったことがあります、当時は県内切っての *oldest hospital* で、手作り的な増改築を繰り返したため裏口・裏道的なところが多すぎ迷子になることしばしば、またその趣に夜院内を歩くのが怖かった思い出があります。ところが今はどうでしょう、市内の超高層鶴園ビルを優に凌ぐ10階建ての近代建築、庄内平野に煌々と光を灯し続ける不夜城と化した外観に加え、整然と整備された電子カルテシステム、新型検査機器等々、およそ全国にも誇れるハードをもつ新病院に生まれ変わりました。変わらないのは…ソフト、そこに勤める各スタッフ。でも私は莊内病院のそこが一番好きです。故郷の訛りに囲まれ、知った顔に囲まれ、日々楽しく仕事をさせて頂いている今日この頃です。

取り留めのない話になり恐縮致しますが、私はまだ修行の身。いつまでこちらにお世話になれるか分かりませんが、何卒ご指導ご鞭撻の程、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

余談ではありますが、デジタルカメラが隆盛を極める昨今、銀塩カメラの暖かみ、良さをつくづく感じております。また、30歳を過ぎた今、思い出や記念日は何らかの形（例えばプロが撮影した写真）として残すべきではないかと思っております。私の意見に共感して頂ける方、市内で秀逸の技術を持つ人間および場所に心当たりがございますので、その節は私に一声おかけください。

～ YBCラジオ番組「朝だ！元気だ！6時半！！」放送中 ～

中 村 秀 幸

YBC ラジオを毎朝お聞きになっていらっしゃる方はご存知かと思いますが、月曜日から金曜日の朝 6 時 30 分より 15 分の番組で「朝だ！元気だ！六時半！！」があります。これは県医師会が協賛して、各地区の医師会の先生が順番で出演し、専門の分野やトピック、健康の問題などを一般の方に分かりやすく解説している番組です。すでに去年は当地区医師会より 8 人の先生方に出演していただきました。最近私も朝の仕事をしながら聞きだしました。先生の意外な側面や人となり、また個人的には興味があるので、先生の日ごろ聞いている音楽や思い出の音楽がきけて、とても面白い番組ですね。

先日私も YBC スタジオに収録に行ってきました。

担当の加藤ディレクター（フリー）からお聞きしたところ、朝の時間帯なのですが結構、農作業やウォーキング、車の中などで聞いておられる市民が多く反響も大きいとのことでした。県の学術広報部の方針もしばらくは継続の方向のこと、来年度も当地区の会員の先生方にも出演のお願いを致します。是非ご快諾をお願い致します。収録の日時は、なかなかウィークデーに時間がとれない先生も多く、土日の収録もあらかじめ調整すれば OK でした。私も 7 日（日）の午後 4 時から 2 時間程度で、取り直しはありませんでしたので、来年お願いする先生方に報告しておきます。意外に楽しめました。

「朝だ！元気だ！6時半！」 月曜日から金曜日まで 朝 6 時 30 分～6 時 45 分

放 送 日	出 演 者	テ ー マ
5月 8日 ～ 5月12日	島田高志先生（島田クリニック）	芸術と精神病
5月15日 ～ 5月19日	三井盾夫先生（三井病院）	産婦人科よもやま話
5月22日 ～ 5月26日	中村秀幸先生（中村内科胃腸科医院）	春だ、歩こう、ウォーキング
5月29日 ～ 6月 2日	真家興隆先生（鶴岡協立病院）	疥癬について
6月 5日 ～ 6月 9日	竹田浩洋先生（湯田川リハ病院）	リハビリについて
6月12日 ～ 6月16日	長島早苗先生（宮原病院）	糖尿病治療のキーワード

表 紙

「山戸能」

佐藤 洋 司

旧温海町では毎年4月中旬から祭が始まり、それも南のほうから順々に北上してくるのです。温海温泉では5月2日からダンツクダンツクと太鼓の音が響き獅子舞が家々を回り、3日となれば祭の行列が行進し、暴れ神輿ももみ合います。

さて、山五十川の祭も5月3日で、河内神社の伝承館で山戸能と山五十川歌舞伎が行われます。山戸能は県指定無形文化財で1100年余り前から伝承されていて櫛引能の流れを汲むとのことです。氏子の酒盛りと一体となっていて、以前に見た櫛引の水焰の能のような幽玄さではなく、ぐっと庶民的な感じでした。続いては山五十川歌舞伎で、これも無形文化財で280年ほどの歴史があり、能とは打って変わってにぎやかな掛け声が飛び交って皆で楽しんでいました。

～編集後記～

中村秀幸

ようやく春めき暖かなそよ風の吹く季節となりました。春山といえば山菜、孟宗の時期ですね。あまりの美味しさに孟宗泥棒も出現とか。私も先日ウォーキングを兼ねて葉わさび、せりやみつば、あいだけとりに行ってきました。

5月は県医師会の後援によるYBCの「朝だ 元気だ 六時半」の放送が鶴岡地区の先生の順番となります。すでに8日の島田先生から始まっていますがプライベート情報や音楽の志向など興味津々です。

5月はまた総会の時期、「17年度の決算」「会務報告」「医師の職業規則」の協議が行われる予定です。より多くの出席をお願いします。

役員分掌や部員、各種公的な会議などの委員も決定されます。中目新会長のもと、諸先輩の培った先進的な医師会にはじぬよう、前向きな姿勢で新しい空気を。

マイペットマイホビー、林先生の意外な？趣味には感心しました。医者ってなんだか凝り性の性格が多いようですね。横山先生のくいしんぼう日記も絶好調、追っかけ試食にいった人も多いと聞きます。

茂木健一郎の著書「脳と創造性」PHP研には、「もうこのぐらいでいいや」と思ったら脳の成長、創造性の終焉とか。日常の診療に、医師会の活動に、趣味に、何よりも自分自身の成長と生きがいを求めて交流、コミュニケーションを持ちたいものです。

次回より編集員も交代があり、斎藤憲康先生、五十嵐裕先生と岡田恒人先生が加わります。わくわくする紙面を作り上げていきますので、アイデアや連載記事、要望などどしどしお寄せください。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・斎藤憲康・五十嵐裕・福原晶子・岡田恒人

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町27-1 TEL 22-0936(代)